

戦功の記録 中世から近世へ

久留島典子

Records of Military Exploits : From the Medieval Period through to Early-Modern Times
KURUSHIMA Noriko

はじめに

①幕末の「軍忠状」

②戦功申告記録の変遷―戦国期まで

③戦功申告記録の変遷―近世初期
おわりに

【論文要旨】

戦功を記録し、それを根拠に恩賞を得ることは、武士にとって最も基本的かつ重要な行為であるといふ。それに関わる南北朝期の軍忠状等については研究の蓄積がある。しかし戦国期、さらには戦争がなくなるとされる近世においては、それらがどのように変化あるいは消失していくのか、必ずしも明らかにされていない。本稿は、中世と近世における武家文書史料の在り方の相違点、共通点を探るといふ観点から、戦功を記録する史料に焦点をあてて、その変遷をみていくものである。

明治二年、版籍奉還直前の秋藩で、戊辰戦争等の戦功調査が組織的になされた。そのなかで、藩の家臣たちからなる軍団司令官たちは、中世軍忠状の典型的文言をもつ記録を藩からの命令に応じて提出し、藩も中世同様の証判を据えて返している。これを、農兵なども含む有志中心に編成された諸隊提出の戦功記録と比較すると、戦死傷者報告という内容は同一だが、軍忠状という形式自体に示される儀礼的性格の有無が大きな相違点となっている。すなわち幕末の藩や藩士たちは、軍忠状を自己の武士という身分の象徴として位置付けていたと考えられる。

ではこの軍忠状とは、どのような歴史的存在なのか。恩賞給与のための軍功認定は、当初、指揮官の面前で口頭によってなされたといわれる。しかし、蒙古襲来合戦時、恩賞決定者である幕府中枢部は戦場地域を遠く離れた鎌倉にあり、一方、戦場が大規模で、戦功認定希望者も多数にのぼったため、初めて文書を介した戦功認定・確認作業がおこなわれるようになったという。その後、軍事関係の文書が定式化され、戦功認定に関わる諸手続きが組織化されていった結果が、各地域で長期間にわたって継続的に戦場が行われた南北朝期の各種軍事関係文書であったとされる。

しかし一五世紀後半にもなると、軍事関係文書の中心は戦功を賞する感状となり、軍忠状など戦功記録・申告文書の残存例は全国的にわずかとなる。ところがその後、軍忠状や頸注文は、室町幕府の武家故実として、幕府との強い結びつきを誇示したい西国の大名・武士たちの間で

再び用いられ、戦国時代最盛期には、大友氏・毛利氏などの戦国大名領国でさかんに作成されるようになった。

さらに豊臣秀吉政権の成立以降、朝鮮への侵略戦争で作成された「鼻請取状」に象徴されるように、戦功報告書とその受理文書という形で軍功認定の方式は一層組織化された。関ヶ原合戦と二度の大坂の陣、また九州の大名家とその家臣の家では、近世初期最後の戦争ともいえる島原の乱に関する、それぞれ膨大な数の戦功記録文書が作成された。この時期の軍忠状自体は、自らの戦場行動を具体的に記したもので、儀礼的要素は希薄である。しかもそれらは、徳川家へ軍功上申するための基礎資料と、恩賞を家臣たちに配分する際の根拠として、大名の家に留めおかれ管理・保管された。やがてこうした戦功記録は、徳川家との関係を語るきわめて重要な証拠として、現実の戦功認定が終了した後も、多くの武家で、家の由緒を示す家譜等に編纂され、幕府自体も、こうした戦功記録を集成していくようになった。

以上のように、戦功記録の系譜を追っていくと、戦功を申請し恩賞に預かるというきわめて現実的な目的のために出現した軍忠状が、その後、二つの方向へと展開していったことが指摘できる。一つは事務的手続き文書としての機能をより純化させ、戦功申告書として、申請する側ではなく、認定する側に保管されていく方向である。そしてもう一つは、「家の記憶」の記録として、家譜や家記に編纂され、一種の由緒書、つまり記念し顕彰するための典拠となっていく方向である。

最初に考察した幕末秋藩の軍忠状も、戦功の記録が戦国時代から近世にかけて変化し、島原の乱で、ある到達点に達した、その系譜のなかに位置づけられる。そしてこのことは同時に、近代以降の軍隊が、中世・近世武士のあり方から執拗に継受していった側面を示唆するといえる。

【キーワード】軍忠状、戦功記録、萩藩、武家文書、武家故実

はじめに

戦功を記録し、それを根拠に恩賞を得ることは、武士にとって最も基本的かつ重要な行為であるとみなされており、それに関わる南北朝期の軍忠状や合戦手負注文については研究の蓄積がある。しかし戦国期、さらには戦争がなくなるとされる近世において、それらがどのように変化あるいは消失していくのか、必ずしも明らかにされていない。以下、中世と近世における武家文書史料の在り方の相違点、共通点を探るといふ観点から、戦功を記録する史料に焦点をあてて、その変遷をみていこう。

①幕末の「軍忠状」

最初に、一つの文書〔史料1〕をみよう。

〔史料1〕 榑崎頼三景福軍忠状（山口県萩市萩博物館所蔵 榑崎文書）
（袖書）（毛利敬親）
「一見了、（印）」

従去年^{明治}三月九日、到九月廿二日、於處々合戦、被疵次第

五月朔日、於奥州白川、景福被疵 壹ヶ所、右之手首

右第一大隊式番中隊司令相勤、関東出張被仰付候所、自身如此之趣、

可被達

上聞候、軍忠状如件、

明治式

榑崎頼三

二月

景福（花押）

益田彈正介殿
（親・祥）

これは山口県萩市の榑崎家に伝わった史料で、差出人の榑崎頼三は、

一九世紀半ば、幕末の戊辰戦争で活躍した萩藩士である。^①内容をみると、版籍奉還（明治二年六月）直前の明治二年（一八六九）二月、頼三が、自身の戊辰戦争時における負傷を、萩藩の重臣であった益田彈正介親祥^{ちかよし}に報告した文書である。一見して、文言は典型的な中世軍忠状そのものであり、袖には「一見了」と書かれ、証判（申請内容を受領証明する文言・花押・印など）としての印まで押されている。この印文は「敬親」と読めるので、その当時の萩藩主毛利敬親の証判であることもわかる。幕末の「軍忠状」といっても過言ではないこの文書（以下「軍忠状1」とする）に注目し、二百年ぶりに現実の戦闘を経験した武士が書いた戦功の記録が、中世を色濃く反映したものであることの意味を考えてみたい。

榑崎頼三が提出した「軍忠状」は、実はもう一通ある。

〔史料2〕 榑崎頼三景福軍忠状（同文書）
（袖書）（毛利敬親）
「一見了、（印）」

第一大隊式番中隊司令官榑崎頼三藤原景福謹言上、

早欲賜 御證判、備後代之亀鑑、軍忠之事、

右、従去年明治元辰ノ三月九日、到同九月廿二日、於武州梁田駅、

総州岩井村、野州、奥州、所々合戦之時、隊中或討死、或被疵人数

備左、

三月九日於武州梁田駅

被疵

一番小隊

伊藤十郎

後日於武州熊谷駅

療養中死亡

伊藤十郎

四月廿日於総州岩井村

討死

一番小隊

田中甚吉

被疵

一番小隊嚮導役

百村発蔵

(中略)

討死 十六人^{〔七を訂正〕}

被疵 四十三人

療養中死亡五人^{〔四を訂正〕}

以上

明治貳

二月

栖崎頼三

景福 (花押)

益田弾正介殿

同月付けのこちらの「軍忠状」(史料2)、以下「軍忠状2」とするは、第一大隊二番中隊司令官である栖崎が、指揮下の将兵一人ずつについて、討死・負傷の状況を、日付と場所を特定して書き上げたものであり、司令官栖崎その人が、各人の軍功の証人となっている。文言は「早く御証判を賜り、後代の亀鑑に備えんと欲す軍忠の事」と古めかしく、証判もあって、やはり体裁は幕末の「軍忠状」といった趣だが、内容からいえば、部隊司令官の死傷者報告といってよい。

二通の「軍忠状」は栖崎家に伝えられ、現在萩博物館に所蔵されているが、明治初年の藩の行政文書である「萩藩庶務記録」によれば、明治二年六月三十日、他の十通の「軍忠状」とともに、この二通も、萩藩の宝庫に納めるよう指示が出されている^{〔2〕}。この藩の記録から、「軍忠状」と呼ばれる文書が、栖崎頼三のもの以外にもあったことがわかる。

さらに、萩藩毛利家の藩政史料がまとめて保存されている山口県文書館毛利家文庫の史料の中に、「軍忠状 乾・坤」「御証判軍忠状写」など萩藩の役所で写された軍忠状控の簿冊^{〔3〕}がある。これらを見ると、幕末の萩藩で「軍忠状」とよばれた文書の性格は、「各部隊司令官から藩の役所にたいして提出された戦死傷者報告」とまとめることができ、栖崎頼三の「軍忠状2」死傷者報告も、これに相当することがわかる。おそらく、明治二年六月に藩の宝庫に納められた他の「軍忠状」も、こうした各部隊からの死傷者報告であったと推測できる。

ところで、各隊よりの死傷者報告という点では、明治二年一月末に藩より諸隊・各人に提出が命じられた「馬関攘夷以来諸兵戦争度数数付」が、萩藩では一般的な戦功報告の形であった。この「戦争度数数付」とは、萩藩にとって幕末の戦争が一段落した段階で、戦闘に参加した人々の状況を明らかにし、褒賞を与えるためのものであった。提出命令(布令記録)^{〔4〕}「史料3」に添えられた「戦争度数数付」のひな形は次のようなものである。

〔史料3〕 布令記録 明治二年一月(三十日)

馬関攘夷以来去辰正月京師戦争ニ至る迄、出張之諸兵戦争度数数其外委敷取調、別紙雛形之通小杉紙二ツ折手本綴ニして書体正敷楷書八行ニ相認候て、早々差出候様被仰付候事、

但諸隊入隊之面々ハ、隊中より申出被仰付候付、別段不及仕出事、右之通組支配中えも可被相触候事、

巳正月

施政局

右

当巳ノ何歳何条何某^{嫡庶等}

何年何月何日於某国某郡某処合戦

何年何月何日於某国某郡某処、合戦被傷、銃創・刀創及ヒ某創、処ヲ分注、

何年何月何日於某国某郡某処、合戦討死、

(下略)

ここには、「何年何月何日於某国某郡某所、合戦被傷、銃創・刀創及ヒ某創、処ヲ分注」あるいは「何年何月何日於某国某郡某所、合戦討死」とあり、また、「戦争度数」提出命令には、諸隊入隊の面々は隊から提出させるので、個人から出す必要はないともある。実際、この命令に応じて各隊から提出された「戦争度数付」が毛利家文庫には多数残っている。また注目できるのは、さきにみた榊崎頼三作成の「軍忠状2」の記載方法が「戦争度数付」のひな型に極めて類似していること、さらには、二通の「軍忠状」の日付が二月であり、この提出命令と対応していることである。

毛利家文庫には、史料名称は「戦功録」「戦争度数付」「軍忠状」などと全く別で、文言・形式も異なるが、内容的には、各戦闘への兵の参加状況と、戦死傷者報告という性格をもつ史料が多数ある。榊崎頼三の二通の「軍忠状」も、この「馬関攘夷以来諸兵戦争度数付」提出命令と類似的の命令に対応して作成されたものと考えられるのである。

このように、明治二年の戦功調査とそれに基づいた賞典授与は、萩藩内で広く組織的に行われ、毛利家文庫には、調査に対する褒賞記録である「戦功賞典録」なども多数残されている。なかには維新団という被差別民からなる隊への賞典授与の史料もある。一連の幕末の戦闘には、長州藩（萩藩）では、藩士はもとより農兵や被差別民まで含め、身分を超えた多数の男たちが様々な軍団に分かれて参加していることがわかる。

そうしたなかで、榊崎を含む司令官が「軍忠状」という名称と形式の戦功報告を作成したのはなぜだろうか。

「戦争度数付」にしろ「軍忠状」にしろ、一般的に戦死傷者報告は、藩として遂行した幕末の戦争において、戦闘に参加した藩士をはじめとする人々に対して、恩賞を給与するためにはどうしても必要な基本情報

であった。そのことは、命令した藩も、命令を受けた戦闘参加者側も、理解していたと思われる。

しかし、戦闘参加者が所属していた幕末の萩藩の軍隊とは、構成員の出自や、編成年次、編成契機も異なる諸隊から形成される極めて複雑な構造を持つ軍団であった。有志中心に編成された諸隊が次々と生まれるなか、重臣を統率者に、家臣たちから編成される、本来の近世の軍団に近い形の諸隊も慶応年間には成立し、榊崎頼三が中隊司令官として属した第一大隊はそうした隊の一つであった。⁽⁵⁾このような重臣・家臣を中心に構成される隊の司令官は皆、藩士のなかでも中・上層身分以上の武士たちであった。彼らには、足軽や中間、さらには農兵まで含め、諸隊の人びとをいわば同格に扱う「戦争度数付」ではなく、軍忠状こそ、武士・軍団統率者が作成するにふさわしい、正統的な戦功記録であるという認識があったと推測される。

こうした認識は藩中枢部も共有していたと考えられ、前にあげた軍忠状控の簿冊を詳しくみていくと、萩藩自体が、中・上層藩士よりなる各軍団の司令官に対しては、中世的な軍忠状文言を持つ戦死傷者報告書の書式を示していた。たとえば「軍忠状 乾」(毛利家文庫三六賞典八号)をみると、軍忠状を差し出す者の家格に合わせて、証判の文言、書きだす位置が細かに決まっていたこと、⁽⁶⁾さらに軍忠状そのものの紙の大きさ、書き方が、「⁽⁷⁾「⁽⁸⁾」と定められていたこともわかる。こうした書式に拠った軍忠状は、申告人から藩側に「伺」を立てることから提出手続きが始まり、差し出された二通に各々証判が据えられた後、一通は宝庫に納められ、もう一通は申告者に下付された。榊崎家に伝わった二通の軍忠状は、この下付されたものの一つであったのだ。⁽⁹⁾さらに、軍忠状にもつづいた感状の作成・下付においても、種々の手続きごとに調進されるべき文書の書式が決まっており、まさに軍忠状・感状の作成・授受自体が、藩中枢

部と中・上層藩士との間の儀礼体系を現出させていたのである。恩賞がもはや知行加増というよりは、何がしかの金品となってしまったことも、文書の授受という儀礼そのものが司令官たちにとって最大の恩賞であったことをうかがわせる。

このような儀礼行為は、幕末段階では、戦争遂行上の必要性はまったくなく、藩中枢部と、各隊司令官を務める中・上層家臣たち両方に共有されていた武士としての身分意識を前提に、藩内の秩序維持を図ろうとする、多分に観念的なものだと思う。結局、この軍忠状提出直後の版籍奉還を経て、廃藩置県によって藩自体が消滅し、藩内の秩序維持や士気高揚も意味を失う。だが、それではこの軍忠状は内容的にまったく無意味なのかといえは、そうではなく、そこに負傷・戦死を記載された者たちにとっては、現実的な戦功申告書であり、恩賞の裏付けであったことも見逃せない。

大きな方向性としては、やはり身分差のない軍隊を実現させる状況になつており、実際、身分を超えた軍団が現われようとしている近代初頭の時点でさえ、あるいはそれ故にこそといえるかもしれないが、強く表れている藩や藩士の自己認識、武士・武家としての身分意識を、軍忠状形式の戦功報告から読み取ることが可能なのである。彼らにとって武士であることの象徴が、中世軍忠状の典型的文言だったといえよう。

これほどまでに、武士が自己の武士という身分の象徴として位置付けていた軍忠状とは、一体どのような歴史的存在なのだろうか。以下、章を改め、中世の「軍忠状」という言葉と文書の形を、幕末の武士たちが如何に変容させながら再生させたのか、彼らの意識を探るために、戦功報告の形を歴史的に跡付けていこう。

② 戦功申告記録の変遷―戦国期まで

(一) 軍忠状の成立

前章では、幕末の「軍忠状」を追う過程で、恩賞給付のための軍功の記録として、一九世紀末においても、中世的軍忠状が強い規範性・規定性を持っていたことを確認できた。しかし、諸隊司令官が提出する戦死傷者報告書という幕末の「軍忠状」の性格は、必ずしも南北朝期の軍忠状と同じとはいえず、そこにはずれがあるといえよう。

では、幕末の「軍忠状」のような戦功記録のあり方は、いつ頃から形成されてきたのだろうか。江戸幕府にとっては長州戦争まで、萩藩にとつても「馬関攘夷」(下関戦争)以前の二百数十年間、戦争がなかったこと、したがって実際の戦功を記す経験がなかったことは確かであり、幕末の幕府や藩は、中世あるいは近世初頭の戦功記録方法から学んだことが推測できる。それでは、中世から近世にかけて戦功記録のあり方はどのように変化したのか、あるいは変化しなかったのだろうか。それは軍忠状が南北朝期以降どう変化したのかという問いでもある。

まず、軍忠状の変化をみていく前に、軍忠状はどのように生まれてきたのかを、先行研究によって簡単に整理してみよう。

源頼朝の時代、すなわち鎌倉幕府成立の契機となる内乱期も含め、恩賞給与のための軍功認定は、指揮官の面前でなされたとされる。軍功が口頭報告され、敵方損害の象徴である「分捕頭」や自身の負傷もその場で確認され、証人による軍功の立証もその時同時に為されたのである。ところが鎌倉時代も半ば、蒙古襲来合戦の時になると、恩賞決定者である幕府中枢部は戦闘地域を遠く離れた鎌倉にあり、一方、戦闘が大規模で、戦功認定希望者も多数にのぼったため、新たに書面を作成して報告

する必要が生じた。すなわち、軍功を文書に記して申請する軍忠申状をはじめ、見知した証人の請文、あるいは軍功を保証する守護挙状などが作成され、初めて文書を介した戦功認定確認作業がおこなわれるようになったのである。よく知られた『竹崎季長合戦絵詞』に描かれた、戦功認定されるまでの種々の苦勞も、軍事関係の文書が定式化され、戦功認定に関わる諸手続きが組織化されるなかで、解消されていった。その到達点が、各地域で長期間にわたって継続的に戦闘が行われた南北朝期の各種軍事関係文書であったとされる。すなわち、証判付の着到状や軍忠状⁽¹⁰⁾、あるいは軍忠状の変形として、自身や自身に隷属する下級兵士の負傷報告に特化した合戦手負注文、同じく敵方損傷報告に特化した分捕頸注文⁽¹¹⁾、また同所で戦った見知者が軍功を証明する証人請文、あるいは上官が証する軍忠挙状などである。

ただし注意しなければならない点は、識字能力も充分でなかった武士たちにとって、書面を介した軍功認定はいわば他律的に始まったのである。当初は「執筆」とよばれる書記役の専門家が武士たちの申告を書面化していった、あるいは、与えられた書式・ひな形を用いて作成したとされる点である。

(二) 南北朝期以降の軍忠状

さて、つぎに南北朝期以降、軍忠状はどのように変化していくのかを見ていこう。一五世紀になっても軍忠状はみられ、特に戦乱の収まらなかった関東を中心に残存例が多い。しかし、一四三〇年代になると、関東では戦闘が継続しているにもかかわらず、軍忠状は激減し、応仁・文明の乱の起こる一五世紀後半では、全国的に軍忠状の残存例はわずかなる。そして関東では戦国時代になっても、いわゆる軍忠状や手負注文・頸注文といった文書名を持つ、戦功を報告・申請する文書はほとんどみられない。一方、西国の大友氏や大内氏・毛利氏では、戦国期になると

軍忠状など戦功を申請する文書が増加していく。以上の地域偏差を含む動きをどのように解すればよいのだろうか。

関東では、一五・一六世紀を通じて政治的な不安定状況が続き、各所で戦闘が行われていたことは、戦功を賞する感状が多数残されていることから裏付けられる。つまり戦功は何らかの形で報告され認定されたことを意味している。もちろん局地的紛争の場合、軍功の申請や保証などが文書を介さずに口頭で直接行われ、後に残すための感状のみ作成された可能性は考えられよう。しかし、全面的に口頭申請に戻ってしまったとは考えにくい。むしろ、軍功申告の書面が作成された場合でも、申告者本人には返されなくなり、軍功認定の結果としての感状のみ渡される方向に変化したと考えられる。そして西国の武家文書の多くでも、一五世紀後半期は、東国と同じく感状のみ残っている場合が多く、同様な事態が推測できる。

ところが一六世紀にはいり西国でも戦闘が恒常化してくると、感状だけでなく「軍忠状」あるいは「手負注文」・「頸注文」「分捕注文」など多様な軍事関係文書が増加してくるのである。

この相違はなぜ生じたのであろうか。中世後期、文書を介した軍功認定を必要としない局地紛争が、東国のみが多かったとは考えがたい以上、多様な軍事関係文書の有無は、実際の必要性の如何によるものではないと推測できる。それでは何か。仮説として、室町幕府との関係が上げられる。幕府から距離をおいた政治的秩序を一五世紀には形成していた東国に比較し、西国は室町幕府將軍との関係がより深く、各地域の守護や戦国大名は、將軍との関係を重視した。その室町幕府の軍功認定方式を、西国大名は積極的に取り入れていったのではないかと仮説である。

そのことを示す興味深い史料が、次に示す弘治二年（一五五六）六月日伊勢貞順軍忠状書札案送状⁽¹²⁾（史料4）である。

〔史料4〕伊勢貞順軍忠状書札案送状（前欠）（入江文書）

（前略）

不知名字 頸一 尾川式部承討捕

亦一説

頸注文 口ノ書様ハ右同前也、

堀六郎被官

頸一 安原源三 佐竹七郎討捕

（中略）

亦一説

頸注文 口ノ書様ハ右同前也、

佐竹七郎討捕

頸一 鵜川六郎 在本平三被官

藤田新八郎討捕

頸一 道羅彦八 小野隼人佐被官

（中略）

被疵人数注文書様之事

被疵人数并討死

鵜崎五郎右衛門尉 手甲太刀疵一ヶ所

八熊平内兵衛尉 討死

賀納新五郎 額鍵疵二ヶ所

目崎藤九郎 胸矢疵二ヶ所

一去十日^{辰刻} 至石河藏人承館、松田豊前守致出張、及合戦之由注進

仕候之条、則馳向、自身太刀、我等親類被官数輩致討死候、仍討

捕頸注文進之候、急度可預御披露事肝要候、恐々謹言、

五月十二日 実名判

平田新左衛門尉殿 裏書如常、

（中略）

右、一卷八ヶ条之事、依御懇望、如形認進候、但他家之用二相替儀可

有之、可被用捨事肝要候、不可為外見者也、

伊勢駿河守

弘治貳年六月日

貞順（花押）

如法寺式部少輔殿

伊勢貞順は室町幕府の政所執事伊勢氏の一族だが、伊勢氏一族は將軍に近侍して、幕府内の儀礼・故実に詳しかった。そのため、地方の武士等の求めに応じて教示した内容が、武家故実書として広く流布するようになり、貞順の場合も、そうした著作が伝わっている。その貞順が、戦国時代の弘治二年（一五五六）に、豊後大友氏の有力一族田原氏に、軍忠状・感状等の書き方のひな形を示して書き送ったものが〔史料4〕として残っている。⁽¹³⁾ 実例をあげて丁寧の説明するこの文書からは、武家故実としての頸注文や手負注文などの軍忠状が、西国、特に大内氏や大友氏の支配下にある武家の間で、広く受容されていたことがわかる。実際、田原氏の文書には、主家である大友氏の当主が袖判を据えた合戦手負注文が伝えられている。

ところで、もう一つ興味深い例が、益田宗兼という武士の軍忠状〔史料5〕である。彼は石見国の武士だが、永正五年（一五〇八）中国地方の有力大名大内義興に従って、將軍足利義植を奉じて上洛した。在京時、宗兼は幕府の儀式次第を書写し、伊勢氏一族と親しく交わるなど、武家故実に強い関心を抱いていたことが家伝史料からわかる。⁽¹⁵⁾ その宗兼は、永正八年（一五一二）、大内軍の一員として、義植に対立する足利義澄・細川澄元勢と京都船岡山で戦うが、その時の分捕頸注文や負傷者の詳細を報告した太刀討注文（手負注文）が〔史料5〕である。

〔史料5〕 益田宗兼船岡山合戦討捕頸并太刀討注文（東京大学史料編纂所蔵益田家文書）

○モト端裏書力
〔於城州舟岡山軍忠之注文 永正八〕

永正八年八月廿四日於船岡山討捕頸注文

頸一 益田又次郎討捕之、

頸一 大谷与三次郎討捕之、

頸一 斎藤平三討捕之、

頸一 垣石十郎兵衛尉討捕之、

頸一 孫左衛門討捕之、
中間
切疵二ヶ所、右ノ手

太刀討注文

益田彈正左衛門尉

波田木工助

大草弥次郎

大谷与三左衛門尉

鐘疵二ヶ所、右ノ足、大谷与三兵衛尉

鐘疵一ヶ所、左ノ手、下孫七

切疵一ヶ所、左ノ手、
鐘疵頭二ヶ所、脇一ヶ所、
討死 小原民部丞

（中略）

矢疵二ヶ所、右ノ足、中間 新三郎

已上

九月十三日 益田治部少輔 宗兼（花押）

記載されている人々は益田氏の家臣たちである。これに対し、將軍義植の感状がでているが、この軍忠状自体に証判はない。船岡山合戦に参加し、感状を残す武家は多数にのぼるが、益田氏のように軍忠状を残した家は他に一家しかない⁽¹⁶⁾。そこから、必要性というよりは、彼らはむしろ

自ら望んで武家故実に倣った軍忠状作成を行ったのではないかと推測される。

このように、武家にとって後々まで残す文書としては一時衰退しかけていた軍忠状だが、室町幕府の武家故実として、幕府との強い結びつきを誇示したい西国の大名・武士たちの間で再び用いられ、戦国時代最盛期には、大友氏・毛利氏などの戦国大名領国でさかんに作成されるようになった。一種武家の象徴的文書として、大内氏領国の毛利氏や吉川氏の文書、あるいは大友氏家臣の家の文書には多数の頸注文・手負注文が残されている。

軍功認定手続きの一環として、武士にとってある意味他律的に始まった軍忠状作成だが、この段階になると、一部地域では、まさに自発的に多数作成されるようになる変化に注目したい。軍功申告という本来の目的のみならず、益田氏にとっての船岡山合戦の事例のように、特定の戦闘における主人と家臣が共に戦った武家の「家の記憶」、それを記録するという、歴史意識さえそこには見いだすことができるのである⁽¹⁷⁾。

③ 戦功申告記録の変遷―近世初期

（一）朝鮮への侵略戦争と鼻請取状

さらに、近世における恩賞認定のための軍功記録を、朝鮮への侵略戦争、徳川氏と豊臣氏が雌雄を決する一連の合戦、そして最後に島原の乱とみていこう。

戦国期西国の軍忠状、なかでも相手方に加えた損傷を報告する「頸注文」が、「文祿・慶長の役」とよばれる朝鮮への侵略戦争において、「鼻請取状」のような文書につながっていくと考えられる⁽¹⁸⁾。北島万次氏によれば、秀吉政権側の武将から各大名への「鼻請取状」は、吉川・鍋島・

黒田・藤堂氏充てのものが現在残り、さらにその前段階の、各大名からその家臣に対して出された鼻請取も残っているという。このうち吉川広家が提出した鼻に対する、秀吉側から派遣されていた戦目付、すなわち監督官の請取状が〔史料6〕である。

〔史料6〕 早川長政外二名連署鼻請取状（『大日本古文書 吉川家文書之一』

一三八号）

於珍原郡請取頸之鼻数之事、

合八百七拾也、

右、慥ニ請取申所也、

慶長貳

九月廿一日

熊谷内蔵丞（花押）^{（直感）}

垣見和泉守（花押）

早川主馬首（花押）

吉川蔵人頭殿^{（広家）}

御陣所

おそらく、これに対応する鼻を送る際の注文も、頸注文と同様に作成されたはずである。あたかも戦利品であるかのように鼻数が記載されている文書は、現代の人間には悍ましいものだが、当時の武士たちにその感覚はなかったと想像できる。

この「鼻請取状」からは、注文自体が証判を加えて返されるのではなく、報告書と、報告書の受理文書という形に変化していることがわかる。そして豊臣秀吉は、頸数を明記し、その鼻の到来を軍功とする内容の感状を、参戦した大名たちに出している。ここからは、大名の家臣・大名・秀吉の家臣・秀吉という間で、申告と受理・承認の文書が対応するかたちで整然と動いているさまが読み取れる。鼻削ぎという残虐行為がいかに

にも組織的に遂行されていたのだ。

（二）大坂の陣と戦功記録

さて、軍功認定の方式が、秀吉政権の成立以降、一層組織化されていく傾向を指摘したが、関ヶ原合戦、徳川方と豊臣方の決戦となった二度の大坂の陣では、膨大な数の戦功の記録が作成され残された。それは戦国時代の西国や秀吉政権の流れをくむものであり、戦闘状況の詳細な報告とともに、分捕りした首級が延々と書き上げられ、討死にした武将名が列記されている。それらの多くは近世大名家で後世に編纂された家記・家譜として残されているが、根拠となる報告文書が存在したことは、丹羽氏の事例で確認できる。

丹羽氏は丹羽長秀が織田信長の重臣で、息子の長重も秀吉につかえるが、関ヶ原合戦後に所領没収されて浪々の身となってしまう。それを救って領地を与えたのが徳川家康であり、大坂の陣では徳川方大名として奮戦する。長重とその家臣たちの戦功については『丹羽家譜』に詳しく記載されているが、それらは丹羽文書に残る多数の「軍忠状」や「証人請書」に基づいていることが知られる。これらの文書類は、家臣たちから長重側近に提出された原本、および丹羽長重から徳川家康側近に報告された長重自身の「軍忠状」の控えである。時と場所を明記して自らの軍功を克明に記した「軍忠状」が多いが、なかには他の者の軍功を見知したことを証明する証人請書も存在する。前者軍忠状の例が〔史料7〕である。

〔史料7〕 大谷勝左衛門尉大坂陣戦功覚（丹羽文書）

^{（端裏書）}
「大谷勝左殿」

今度大坂表五月七日之御合戦之刻、我等敵二相申所、御人数御立被成候、下ノ田を越、畠へあかり、其末ニひろき野ノことくなる畠御

座候、其島より敵七八人ほかかり申候、島にて鎧を仕おひこみ、
田にてつきたをし、かふとなからくひを取、御目にかけ申候、

以上

九月十五日

大谷勝左衛門尉（花押）

浅尾勘太殿

こうしてみると、戦功の要素は、鎌倉時代からほとんど変わらないともいえる。すなわち、戦功が討死・戦傷などのいわば味方の損害内容と、分捕り類などの敵方損害内容からなり、こうした戦功を証明してくれる証人の存在が必要不可欠といった点である。しかし一方、丹羽氏の場合でみると、この時期の「軍忠状」は文言自体が中世の軍忠状とは全く異なり、自らの戦闘行動を具体的に記したもので、儀礼的要素は希薄である。文書の性格としても、もはや証判を加えて再び家臣に返すようなものでないことは明らかである。これらの「軍忠状」は、さらに丹羽氏が徳川家に軍功を上申するための基礎資料であるとともに、徳川家から恩賞として領地を増された後、それを家臣たちに配分する際の根拠でもあった。他の大名家などでも、こうした報告が徴され、それらをまとめて徳川家に報告して大名家として恩賞を得るとともに、保管・管理している戦功報告をもとに、家臣たちに配分したと考えられるのである。²⁰⁾

このように徳川方として参陣した諸家にとっては、大坂の陣の戦功記録は、徳川家と自らの家の関係を語る上できわめて重要なものであった。現実の戦功認定が終了した後も、多くの武家で、家の由緒を示す記録として家伝等に編纂され、幕府自体も、こうした戦功記録を集成していこうとしたのである。逆にそれ故か、丹羽氏のような例外を除けば、当時の一次史料としての戦功記録は意外に少なく、後世の編纂の手がはいっているものがほとんどである。また、すべての武家で大坂の陣が重要視されたのではなく、特に九州の大名家とその家臣の家では、むしろつぎ

に見る島原の乱こそ、多数の戦功記録が作成され残され、後々まで記念されるべき重要な合戦とみなされていた。

（三）島原の乱と戦功記録

大坂の陣で確立した徳川家―江戸幕府の支配を揺るがせたのが、十七世紀最後の合戦ともいえる島原の乱である。本格的に参陣したのは九州の諸大名に限られているとはいえ、細川家、黒田家、鍋島家などには、膨大な戦功記録の一次史料が残された。

ただしこの合戦は、武家大名同士の争いではなく、相手が百姓を中心とした一揆衆であったため、従来の国内戦とは異なっていた。一番大きな違いは、総攻撃時には切り捨てが命令され、分捕り類注文など相手側損傷の詳細な戦功記録も作成されなかった点である。

それでも個々の武士は首取、鼻削ぎに熱中していたことが史料から確認でき、朝鮮への侵略戦の時と同じように、首数のみを記した注文を幕府に提出した大名もいた。しかし細川家中では、首数等の多寡は戦功認定であり考慮されなかった。かわりに重視されたのが、諸隊の指揮ぶりなど組織的戦闘行動であり、逆に軍令違反の抜け駆けは厳しく禁止された。

一揆衆の立て籠もる原城二の丸一番乗りという、武家の伝統からいえば大きな功名をあげた鍋島家の軍団が、軍令違反を問われ、当主が閉門処分とされたことは、従来とは大きく異なっており、集団の統制を重視した新たな戦功認定基準がもたらした象徴的事件といえる。その基準は諸家でも重視され、肥後細川家の家老、松井家に残る「有馬陣武功穿鑿覚書」という史料によれば、軍令に反し持場を離れて敵を倒しても、戦功とは認定されなかったという。同じ松井家の「有馬陣戦功の者書付」には、各家臣の働きとその評価が四段階に分けて記載されており、種々の調査結果をもとに評価が厳密になされたことがわかる。²¹⁾

このように、島原の乱は、武家社会のなかでこれまで伝統とされてきた戦いのあり方、戦功の基準を大きく変容させるものであったといえる。さらにこの合戦は、主人を持たない武士、すなわち牢人たちにとっては、戦功をあげて士官の途を開く最後の機会でもあった。幕府による軍事行動が開始されると、関ヶ原合戦以降、主家を取り潰されて浪々の身にある武士たちが、各地から島原に集まり幕府軍に加わったのである。たとえば、牢人であった三池親家父子は、筑後柳川立花家の軍団に属して参戦しようだが、細川家の方が仕官に有利とみたのか、同じ場所で戦っていた細川家につきのような戦功申告書を出している。

〔史料8〕三池親家・源太夫有馬陣持差出（個人蔵）⁽²²⁾

二月廿七日差出シ

一、本丸石垣二つき、屏之やふれよりなた・長刀二てつき申候を、鎧二て打おとし、長刀取申候、其後、石二てうたれ、いたミ申二付、下迄引取申候、右之証人長谷部文左衛門二御尋可被成候、以上、

二月廿九日

三池左馬丞

（花押）

同 源太夫

（花押）

（三淵重政）
長岡右馬助殿

この史料をみると、前に見た丹羽氏家臣のものと同様、江戸時代の実際の戦功報告が、中世的軍忠状のような格式ばったものではなく、自身が戦場でどのような行動をとり、その結果相手に与えた損害と自己が受けた損害を、素朴に書き連ねたものであることがわかる。

この例では、三池氏の必死な思いが通じ、細川家への仕官がかなったという。先に触れた松井家でも、他国・牢人衆の武功調査を命じられ、その結果を記した史料が残っているが、それらを見ると、当人の今後の社会的身分にかかわるだけに、証人を立て極めて厳密に調査のなされていることに驚く。

以上のように、島原の乱では、各武士からの戦功申告をまとめ、それらを調査し評価した文書が、戦功を認定する主家の側に膨大に残されることとなった。そのあり方は極めて組織的、ある意味事務的であり、個々の武士が抱く名誉や伝統よりも、集団の統制を重視する武家社会の変化と揆を一にしているようにもみうけられる。首取りは実際には多数行われたものの、第一義的な戦功とはみなされず、頸注文も作成されなかったようだ。これらの点は二百年を経て幕末の戦争でも受け継がれていくのである。

おわりに

島原の乱以降、戦争はなくなり、武家社会のなかで、主人に果たすべき武士の義務のうち「軍忠」は観念的なものとなり、もつと一般的な「奉公」へと変化していく。「奉公書」なる文書も生まれてくる。⁽²³⁾

一方、軍功記録という点では、現実の戦争がなくなるとともに、恩賞認定のためという実質的な目的を持つ記録ではなく、さきに中世末の特定の戦闘における「家の記憶」の記録化として指摘した点が次第に肥大化していくことが注目できよう。家記・家譜という形で編纂された「武家の由緒書」とでもいうべき軍功の記録が増加していくのである。記録というより叙述といったほうがよいそれらには、軍記物と通底する要素も含まれてはいるが、まったくの荒唐無稽なものは少なく、記録性が重視されている点が特徴である。

特に島原の乱では、出兵した大名家を中心に、当初はまさに現実の戦功認定のために膨大な記録が作成されたわけだが、後にはそれらが各大名家（御家）、各家臣家（家）の記念すべき歴史、「集団の記憶」として種々の形で編纂され、顕彰されるようになる。たとえば島原の乱に参陣した秋月黒田家では、幕末の天保八年（一八三七）陣後二百年を記

念して、初代当主黒田長興の戦功を顕彰すべく「島原陣図屏風」とよばれる壮大な屏風絵が制作されている。その描写は黒田家に伝わる種々の記録に基づいていることが確認されている。

以上のように、戦功の記録の系譜を追ってくると、戦功を申請し恩賞に預かるという極めて現実的な目的のために出現した軍忠状が、その後、二つの方向へと展開していったことが指摘できる。一つは事務的手続き文書としての機能をより純化させ、戦功申告書として、申請する側ではなく、認定する側に保管されていく方向である。そしてもう一つは、「家の記憶」の記録として、家譜や家記に編纂され、一種の由緒書、つまり記念し顕彰するための典拠となっていく方向である。

最初にとりあげた萩藩における幕末の「軍忠状」は、文言は中世の軍忠状そのものであったとしても、戦功（戦死傷者）申告書として、事務的文書の性格を強く持っていた。これは第一の方向である。しかし一方で、たとえば軍忠状の袖に外題として毛利家当主の書く外題証判「一見了」の位置が、司令官の藩士の家の格によって、細かく序列化されていたことが示すように、極めて儀礼化されていたことも事実である。さらに、幕末の現実の軍団は多様な人びとから構成されていて、中隊長などの司令官もまた、その能力によって他家から抜擢される場合が少なからず存在した。つまり隊の構成員皆が、必ずしも同じ家に属する私兵ではないにもかかわらず、証判付き軍忠状が提出者である司令官に返された点には、形骸化もみてとれる。戦国時代の益田宗兼の家や、江戸時代の丹羽長重の家とは異なり、軍忠状に記載された人びとが、軍忠状に基づいて各家から恩賞に預かることは、必ずしも想定されていないのである。むしろ、軍忠状は、司令官の家にとつての「家の記憶」、名誉にすぎないといったほうがよく、こうした儀礼化、形骸化は第二の方向性である。このことは、榑崎頼三の場合に典型的にいえる。頼三は軍忠状を作成した翌年、明治三年にフランス留学に旅立ち、明治八年二月パリで病死

している。⁽²⁴⁾二通の軍忠状を含む榑崎家の頼三関係史料は、彼の早すぎる死を悼んでまとめられたものであり、ここには「頼三の記憶」を二通の軍忠状を以て記念碑的に残そうとする、第二の方向性を確認できるのである。つまり、一見懐古趣味にしか見えない榑崎頼三の二通の軍忠状は、戦功の記録が戦国時代から近世にかけて変化し、島原の乱で、ある到達点に達した、その流れをしっかりと受けたものであることがわかる。

そうした系譜のなかに位置づけられる榑崎の戦功報告には、もちろん頸注文はない。しかし、頸注文がなくなること、即、首取が行われなくなったことを意味するのではなく、首取行為は戊辰戦争まで確認でき、西南戦争段階になって初めて禁止されたという。近代の軍隊は、榑崎も属した幕末萩藩の軍事編成などをもとに生まれてくるといわれるが、そこに明らかな断絶があることは確かである。と同時に、近代の軍隊には、中世・近世の武士のあり方から執拗に継受されていく側面があったことも確かではないだろうか。

註

- (1) 道迫真吾「萩博物館所蔵榑崎頼三関係資料」(「萩博物館調査研究報告」第六号、萩博物館、二〇一一年)において、榑崎頼三の略歴とともに史料の紹介がされている。この史料に注目した菱沼一憲・高橋一樹両氏によって、二〇一〇年本館企画展示「武士とは何か」に展示され、「戦功の認定」というテーマのもとに菱沼氏が同展図録において展示品解説を行っている。本稿はこの時展示された本史料に触発されて、より詳しく考察を加えたものであり、戦功の通史的把握という点では、菱沼氏の図録解説をも参照願いたい。
- (2) 『山口県史 史料編 幕末維新6』(山口県、二〇一一年)八九五頁、「諸隊関係編年史料」明治二年六月三十日条。
- (3) 『山口県文書館資料目録4 毛利家文庫目録第四』(山口県文書館、一九七四年五月)「三六 賞典」六号一〇号。
- (4) 『山口県史 史料編 幕末維新6』八七四頁、「諸隊関係編年史料」明治二年一月三十日条。
- (5) 第一大隊は萩藩水代家老家であった須佐益田家(当時の家督は親祥)を統率者

とする隊（北第一大隊）であった。

- (6) 御末家、御一門、鈴尾（福原家）、老中、年寄已下寄組、大組遠近附という家格に依りて、外題（証判）の位置が上がついていくとされる。

- (7) 同様に、たとえば右田毛利家文書（山口県文書館）には、慶応四年四月毛利親信軍忠状等が伝わっている。

- (8) 「陣書」、「御奉書」、「御請」等の文書が藩側から発給されている。

- (9) 先行研究については漆原徹『中世軍忠状とその世界』（東京 吉川弘文館、一九九八年）参照。

- (10) ここでいう軍忠状とは、軍団に参加したこと、あるいは自身や被官が戦場で負傷したことを書面で司令官に申請し、承認のしるしを受けて返却された文書の意味する。

- (11) 分捕頭（首）注文形式の文書は、南北朝期というより、むしろ戦国期の西国や関ヶ原合戦時のものが多く残存している。

- (12) 『史料纂集 入江文書』（上田純一校訂、東京 続群書類完成会、一九八六年）一〇七号。

- (13) 如法寺氏は、豊後田原氏の一族で、南北朝期の田原貞広息氏信から分かれた家であり、田原本宗家に従っていた。

- (14) 『大日本古文書 益田家文書之二』（東京大学史料編纂所、二〇〇〇年）二〇八号。

- (15) 例えば『大日本古文書 益田家文書』第一冊所収の二六一号「殿中年中行事記録」、同第三冊所収の六七九号、六九一号伊勢氏・細川氏関係者からの書状類などを参照のこと。

- (16) 永正八年九月六日天野元連軍忠状（「閩閩録」巻百六十四、三田尻裁判、深野忠兵衛）。

- (17) 西国に比較して東国では、手負注文、頸注文などはほとんど残存していない。ただし「討捕」の証判が戦功を得るために示されたことは、時代は下るが「及防戦敵数多討捕、鼻驗十四到来候」（天正十二年）十月十六日北条氏直書状写（『戦国遺文 後北条氏編』二七二五号）といった文言などから推測できる。

- (18) 既に後北条氏の史料において、「鼻驗」を頸の代わりに戦功の証とする記述がみられたことは、註（17）参照。

- (19) 北島万次「秀吉の朝鮮侵略における鼻切りと虚構の供養」（『メトロポリタン史学』第六号、二〇一一年）。

- (20) つまり大名家内部で、それぞれ独自に家臣から戦功を報告させ、その文書は各々の大名家で保管している。その保管文書の情報をもとに、徳川家への戦功報告書（大名家が家臣から戦功を報告させた形式とは当然異なる形式）を作成したり、その保管文書を大名家内部の恩賞配分のための基礎資料に利用したり、あるいは

は家譜編纂に利用したのだと考えられる。

- (21) 林千寿「天草・島原の乱 徳川幕府を震撼させた百二十日」（八代市立博物館 未来の森ミュージアム編『八代の歴史と文化12 天草・島原の乱―徳川幕府を震撼させた百二十日』、同館、二〇〇二年）、同「島原の乱における戦功認識について」（『日本歴史』六七九号、二〇〇四年）。

- (22) 註（21）展示図録九八頁掲載史料。

- (23) これまでも例に出してきた萩藩永代家老家益田氏の家伝史料には、寛永十二年七月一日牛庵（益田元祥）一代奉公覚書（『大日本古文書 益田家文書』第二冊所収四六一号、ただし誓紙部分は未収）という史料がある。

- (24) 註（1）道迫二〇一一年、参照。

【付記】 本稿は、二〇一一年一〇月にミシガン大学で開催された同大学日本研究所主催シンポジウム“The Early Modern ‘Medieval’: Reconstructing Japanese Past”で報告した内容を修正したものである。

（東京大学史料編纂所、国立歴史民俗博物館共同研究員）
（二〇一三年一月二五日受付、二〇一三年三月二六日審査終了）

Records of Military Exploits : From the Medieval Period through to Early-Modern Times

KURUSHIMA Noriko

It is commonly considered that after distinguished war service or performing acts of valor, their recording and the acquiring of rewards in recognition are the most fundamental and important practice of a *bushi* (warrior), and many studies have been conducted on *gunchujo* (requests for recognition of military success and heroic deeds) made during the period of the Northern and Southern Dynasties (1336–1392). However, it has not been completely clarified how *gunchujo* changed, disappeared, and reappeared during the period of the Warring States (1493–1590) and later were used in early-modern times during which internally Japan was at peace. To explore both the differences and common points found in documents from the archives of samurai families of the medieval period and early-modern times, this paper focuses on historical materials that record meritorious service in war and examines changes to their content, style and the system of application.

In 1869, just before the return of the *han* (domain) registers to the Meiji Emperor, a survey on military exploits in the Boshin War and other wars was systematically conducted among samurai families in the Hagi *han*. In compliance with the directions given by the *han*, the chief retainers submitted records with phrasing typical of medieval period *gunchujo*. The *han* then returned these records to the samurai with a seal of proof similar to those used in the medieval period. When these records are compared with other records of military exploits submitted by volunteer corps including peasant soldiers, war casualties and war dead are commonly described, but a significant distinction is whether they were written in the typical format and style of *gunchujo* or not. In other words, it can be considered that *han* and retainers in the closing days of the Tokugawa Shogunate positioned *gunchujo* as a symbol of their rank as *bushi*.

Now the question arises: What is the historical meaning of this *gunchujo*? According to the historical sources, in early times the reporting and acknowledgement of martial exploits to receive rewards was made verbally in the presence of a commander. However, during the battles of the Mongol Invasions (1274 and 1281), the Shogunate government who were the arbitrators of rewards resided in Kamakura, far from the battle area. The battles were on a large scale and the number of *bushi* wishing acknowledgement of military exploits numerous; therefore, for the first time bureaucratic work to confirm acknowledgement of military exploits by means of documents was carried out. Afterward, documents related to military affairs were standardized, and procedures concerning acknowledgement of military exploits were systematized, consequently becoming those documents on military affairs used during the period of the Northern and Southern Dynasties, in which battles were fought in many regions over a prolonged period.

In the late 15th century, however, most documents on military affairs changed to a simple citation to praise military exploits, and throughout Japan the remaining examples of *gunchujo* and other documents to record and report military exploits significantly decreased. Later, however, *daimyo* (feudal lords) and *bushi* in the western part, who wanted to display their strong connection with the Shogunate, started to use *gunchujo* and *kubichumon* again, reviving the old customs and manners of samurai families of the Muromachi Shogunate, and in the high season of the Warring States period, they were increasingly drawn up in the domains of the Otomo and Mori clan warlords.

Moreover, after the establishment of the Hideyoshi administration, a system to acknowledge military exploits was further refined in the form of a military exploit report and a document confirming its acceptance, as symbolized by *hana uketorijo* (the nose receipt documents) issued during the attempted conquest of Korea. After the Battle of Sekigahara (1600), and the two Sieges of Osaka (1614 and 1615), a massive amount of military exploit record documents were created; the Shimabara Uprising (1637–1638), which is regarded as the last battle in the beginning of early-modern times, also gave rise to numerous *gunchujo* created by “outside” *daimyo* families and their retainer families in Kyushu. *Gunchujo* at this period specifically described details of a *bushi*’s military action and deeds, and formal elements are minimal. In addition, these documents were kept, managed, and stored in the residence of a *daimyo* as a basic material to report military exploits to the Tokugawa family, as well as to provide evidence for the allocation of rewards to retainers. In due course, even after the formal completion of the actual acknowledgement procedure, many samurai families came to collect their military exploit records and incorporated them into their family tradition and history as very important evidence confirming their relation with the Tokugawa family. The Shogunate as well came to compile such records of military exploits.

As described above, by following the genealogy of military exploit records, it has been found that *gunchujo*, which first appeared for the very practical purpose of acclaiming military exploits and receiving rewards, subsequently developed in two directions. In one direction their function as a document for administrative procedure was further refined, and they came to be kept as a record of an application by the side granting acknowledgement, not by the side making the application; and in the other direction they were absorbed into the family tradition as a “memory of the family,” becoming a kind of physical verification to be handed down through the generations, in other words, a reliable source for honoring and commemorating the memory of a family’s ancestors.

The *gunchujo* of the Hagi *han* in the last days of the Tokugawa Shogunate can also be positioned in a genealogical record where the record of military exploits changed from the Warring States period through to early-modern times, and reached the end with the Shimabara Uprising. One can safely state that this also suggests an aspect whereby the military soldier of modern times tenaciously carried on the mores of medieval and early-modern *bushi*.

Key words: *gunchujo*, record of military exploits, Hagi *han*, archives of samurai families, old customs and manners of samurai families
